

オレゴ世代応援します

人生一毛作

大宮知信
 おみや・とものお ノンフィクション・ライター
 1948年、茨城県生まれ。中学卒業後、東京下町の本舗販売会社に集団就職。キター流し、週刊誌編集者など二十数回の転職を繰り返して、現在に至る。政治、経済、社会問題など幅広い分野で執筆。「平山都夫の真実」(新講社)「死ぬのにはくらかかるか!」(宝島社)など著書多数

半導体の営業から旅行業へ 都会と田舎の架け橋目指す

しゃれた洋風の家が立ち並ぶ横浜市青葉区。表札の下に小さな社名のプレートが付いている。玄関から顔を出した家の主は、櫻井重(しげる)、61歳。半導体メーカーのモトローラに20年、代理店に営業マンとして7年間勤めた。いまは旅行代理店の社長だ。「前から過疎化や限界集落が気になっていて、シニア層、特に団塊の世代あたりを田舎に連れて行くことはできないかと思っているんです」52歳の時、たまたま立ち寄った書店で旅行業の資格試験の問題集が目に入ったのが起業のきっかけ。会社がある新宿のきつかけ。会社がある新宿までの1時間、電車内で猛勉強。「旅行業取扱管理者」に一発合格。2009年2月に早期退職した。「会社を辞めて何かやるにしても、同じ業界はやだな、新しい人間関係をつくりたいな」と思ったんです。旅行業は



ウジェーヌ・ドラクロワの代表作「民衆を率いる自由の女神」

特定の種類に関係なく、幅広いような方と付き合いが出来ますので。当初は起業家セミナーで知り合った中国人実業家と二人で中国人観光客のツアーを中心に仕事をしていたが、意見の違ひもありコンビを解消。その後、高齢者団体の役員からツアーの相談を受けるようになり、シニア層にターゲットを絞って事業を展開することに。そこへ発生したのが東

日本大震災。
 「阪神淡路大震災の時、神戸でも仮設住宅での孤独死が問題になりましたが、たまたまは外に出てパソールの下で一緒にお茶でも飲みましょう」という趣旨で、被災地の応援ツアーを企画、1年間毎月実施した。「このツアーを通じて東北のよきを知ってもらえた」と思っています。

人生には何も考えずに「ホー」とそんな一時もいいものです
 たったひとと人に生まれて良かった良かったほんとに良かった良かった
 東京 荏司由太郎

ウジェーヌ・ドラクロワ
 今から130年前の昨日、
 高く灯を掲げ

脳内の奇妙な冒険
 中野信子
 the World 世界を照らす自由」といふ。英語表記では特に「女神」と書かれてはいないのだが、この像の顔の部分は、バルトルディの母がモデルになっている。そのことを考慮に入れて日本語では、女神、と訳されたのかもしれない。



わな女性であることが、女神、と訳されたのかも知れない。ドラクロワは、外交官のシャルル・ドラクロワの息子として生まれた。しかし、実の父は同じく外交官のタレーランではなく、猶(つう)ろ(う)かい。ウジェーヌがその血を引いているのかどうか、今となっては鑑定ができるわけでは

と記している。作風は、劇的で荒々しい場面構成と、あられるような独特の色彩感で知られる。現代の感覚からみれば常識的、といえる範疇(はんちゆう)にははいりかねないが、当時の感覚からすれば型破りな画家であったろう。自由、というキーワードに心惹かれ、意識的であったろうことが想像される。

「自由である」ということは、人間にとって好ましい価値を持つ」と多くの人が考えていると思う。しかしながら、自由であること＝選択肢の数が増えること

で説明しよう。2つの選択肢があるとする。そのうち1つを選ばなければならぬ場合、もう1つの選択肢は自動的に棄却される。このとき、50%の可能性を捨てた。私たちは認知している。選択肢が10に増えたとしても、すると、棄却しなければならぬ選択肢は9つになる。このとき、90%の可能性を捨てた。と私たちは感じる。さらには、選択肢が100になれば、99%の可能性を私たちは捨てるべきではない。増えれば増えれば捨ててしまった可能性を思い、後悔する確率があがってしまう。

～経済も「転落注意!」～